

論文の内容の要旨

論文題目 冷戦終結後の開発・安全保障言説における人間像
 —小型武器規制・通常兵器移転規制の事例から—

氏名 榎 本 珠 良

1990 年代以降,「北」の国家,国際機関,非政府組織(NGO),研究者をはじめとするアクターのなかで,開発と安全保障が融合した特定の言説が共有されるようになった。そして,この言説の形成には,国際関係論及びその一領域である安全保障研究の動向も,一定の影響を及ぼしていた。

1980 年代以降の国際関係論においては,ネオリアリズムやネオリベラリズムといった「主流」の理論について,国家中心主義や実証主義を前提としていると批判し,「より人間中心」で「全人類的」な国際関係論を目指そうとする動きがみられた。こうした動きのなかで,1990 年代には,安全保障研究の分野においても,批判的安全保障研究と呼ばれる研究が盛んになった。そして,とりわけ初期の批判的安全保障研究の論者は,概して「人間」(ないし個人あるいは人々)の「解放」を安全保障の中心に据えて国家だけでなくコミュニティや個人も安全保障の対象と見做すべきであると論じ,パワーや秩序ではなく「解放」こそが「真の安全保障」をもたらすのであるとして,軍事だけでなく経済,環境,社会等の領域にまで安全保障のテーマを拡大することを支持した。

このような研究者及び「北」の政府,国際機関,NGO などの政策論議においては,人間の「解放」に対する様々な制約を取り払うことを中心に据えた「人間の安全保障」概念が形成されていった。そして,「人間の安全保障」をめぐる政策論議においては,いわゆる平時と紛争時及び紛争後に必要とされる取り組みの境界線が曖昧化し,それら全ての段階において,「南」の個人の心・価値観・態度・行動や社会的関係を変容させ,「南」の政府に「適切」な政策を実施する意思や能力を形成させる必要性が謳われ,「北」の政府,国際機関,NGO などが「南」に対して介入することが正当化された。同時に,この論議においては,そのような社会全体の変容のためには,内外諸アクターの有機的連携と調整が必要であると論じられた。

本論文は、次の 2 点を目的とする。まず、第 1 の目的は、1990 年代以降に開発と安全保障をめぐる政策論議において主流化した言説（以下では開発・安全保障言説と記す）によって立つ人間像とはいかなるものであるかを考察することである。次に、第 2 の目的は、開発と安全保障をめぐる特定の政策領域における国際合意の形成や個別の施策の事例を検証することにより、開発・安全保障言説における遠大な介入の論理——「南」の個人の心や社会的関係のレベルから社会全体を変容させるための広範な介入が必要であり、そのために諸アクターが有機的に連携すべきだという論理——と、国際合意の形成や個々の施策における実践との間の乖離を指摘し、その乖離が生み出される理由を考察することである。そして、この 2 点を検討するにあたり、本論文は、1990 年代以降の開発と安全保障をめぐる広範な政策領域のなかでも、小型武器規制・通常兵器移転規制の領域に焦点を当てる。また、本論文は二部構成とし、第一部にあたる第一章から第五章にかけては第 1 の目的を、第二部にあたる第六章から第七章にかけては第 2 の目的を扱う。

まず、第一章では、1990 年代に開発と安全保障の政策論議が接近し融合した経緯を辿り、20 世紀後半の「北」の社会における近代性や物質主義に対する批判が「南」の開発をめぐる政策論議に影響を及ぼし、人間中心主義に対する懐疑に伴って「北」の社会に浸透した「脆弱な人間」像が「南」に投影されるようになったために、開発と安全保障の政策論議が接近し融合したことを指摘する。開発・安全保障言説においては、人間とは自らの利益が何であるかを必ずしも十全に認識することができず、「傷」を受けることにより機能不全となる可能性を常にはらむ脆弱な存在と見做される。だからこそ、開発（貧困）問題と武力紛争や暴力の問題が結び付けられ、「南」の個人や国家が「より脆弱でよりリスクが高い」状態にあると危惧され、「南」の個人の心や社会的関係から公的機関の能力等に至る広範な領域に対する介入が正当化されるのである。

第二章及び第三章では、小型武器規制・通常兵器移転規制の領域においても、1990 年代以降になると開発と安全保障の双方の政策論議を融合させる言説が主流を占めるようになり、国連を中心とする枠組みにおいて多様なアクターの関与の下で各種の合意が形成されていった過程を具体的に論じていく。まず、第二章では、小型武器規制をめぐる 1990 年代以降の政策論議において中心的な位置を占める国連小型武器プロセスの経緯を概観し、第三章では、小型武器だけでなく重兵器も含む通常兵器全般の移転規制をめぐる 1990 年代以降の国際的な論議や国連プロセスを辿る。

第四章では、時代を遡って 19 世紀末から冷戦終結までの通常兵器移転等の規制の歴史を振り返る。そして、移転規制と人々の内的問題への介入の双方を正当化する言説が「国際社会」で主流を占めるようになり、多くの国が参加する国際的な合意が成立した時期が、19 世紀末と 1990 年代以降に限られることを示す。

第五章では、通常兵器移転等の規制をめぐる 19 世紀末以降の政策論議において国際合意の形成を推進した（あるいは合意の形成ないし合意における規制方法を批判した）言説及びそこに表出する人間像の変遷を辿る。それにより、1990 年代以降の言説が依拠する「脆弱な人間」像を浮かび上がらせるとともに、一見すると類似点の多い 19 世紀末と 1990 年代以降の言説の間にある相違と、それらが依拠する人間像の相違を明らかにする。

まず、19 世紀末に主流となり国際合意の形成を支えた言説は、当為命題としての「自律した理性的な

人間」像を前提とし、「我々」の側においては「自律した理性的な人間」が国家を運営して自国の利益や自国民の幸福を追求しようと期待する一方で、アフリカの「彼ら」は概してそのような「人間」ではなく、それゆえ当面は国家を形成する資格や能力を持っていないと見做す傾向があった。しかし、第 1 次世界大戦後から冷戦期(とりわけ 1970 年代まで)には、多くの国家の参加の下で通常兵器の移転等を規制する国際合意を形成することは困難になった。この時期に規制合意の形成を推進した大国ないし「北」の国々の言説においては、人間の理性への懐疑が徐々に色濃く表出するようになった一方で、小国ないし「南」の国々は、「自律した理性的な人間」像を基礎にして形成された主権平等や内政不干渉の論理を強く主張して国際合意の形成ないし規制推進派が提案した規制内容を批判し、こうした批判が交渉プロセスの形成や条約発効を妨げる一因となった。

これに対して、1990 年代以降の小型武器規制・通常兵器移転規制に関する合意形成を支えた言説は、開発・安全保障言説を貫く「脆弱な人間」像に依拠して、「南」の人々や政府を「より脆弱」で「リスクが高い」存在として危険視する。そして、この「リスク(の高さ)」という論理が、「南」の国家が「国際法的主権」を有することを前提にしつつも、「南」の(個人の内面を含む)広範な領域に対して多様な外部アクターが介入することや、「リスクが高い」人々の手に武器が渡ることを阻止すべく国際合意を形成することを正当化するのである。ただし、同時に、この言説は、「自律した理性的な人間」像を懐疑し「脆弱な人間」像を普遍視する見方に依拠しているために、「南」の人々や政府を導くべき目的を正しく認識し追求できる「人間」を、「南」の人々のなかにも外部アクターのなかにも見出していない。したがって、この言説においては、「南」の人々や政府を導くべき方向性や目的が曖昧とならざるをえない。

続けて、第二部では、まず第六章において、国連の場を軸にした合意形成という「グローバル」なレベルの事例を扱う。そして、小型武器規制・通常兵器移転規制について 1990 年代以降に形成された国際合意は、「南」の個人やコミュニティのレベルから社会全体を根本的に変容させようとするような介入や、そのための諸アクターの有機的連携や調整を必ずしも可能にする内容ではないことを明らかにする。

次に、第七章では、北部ウガンダ・アチョリ地域における武装解除・動員解除・社会復帰(DDR)、治安部門改革(SSR)、紛争後の和解促進、社会的関係の再構築、暴力の文化の撲滅と平和の文化の構築といった「ローカル」なレベルの事例を検討する。そして、小型武器規制・通常兵器移転規制言説において必要と見做されるような施策が実施される場合であっても、「南」の人々の心を特定の方向に導き社会全体を変容させようとする介入が内外の諸アクターによる調整の下に実施されるような状況は、必ずしも現実のものにならないことを示す。

その上で、第六章及び第七章では、開発・安全保障言説における介入の論理と、国際合意の形成や個々の施策における実践との間に乖離が生み出される理由を、この言説が「自律した理性的な人間」像への懐疑及びそれに伴って形成された「脆弱な人間」像に基礎付けられている点と、この人間像及びそれに依拠した介入の論理が普遍的に共有されているわけではない点に焦点を当てて考察する。

本論文は、開発・安全保障言説が依拠する人間像に着目することにより、この言説の形成と主流化は、初期の批判的安全保障研究が論じるような、グローバルな「人間の解放」の実践を通じたコスモポリタンな世界秩序への道程を意味するものでも、初期の研究を批判する論者が指摘するような、統治の主体を創出しようとする覇権的秩序の興隆を示唆するものでもないことを明らかにする。